

文化 第80巻 第3・4号 一秋・冬一 別刷
平成29年3月25日発行

近世後期江戸語終助詞「サ」の意味

黄 孝 善

近世後期江戸語終助詞「サ」の意味

黄 孝 善

1.0 はじめに

近世後期江戸語では、文末に多くの終助詞が用いられているが、その中に「サ」という終助詞（以下、江戸語終助詞はカタカナ表記する）がある。この江戸語終助詞「サ」について、長崎靖子（2012）は「断定」の意味を持つものであるとしている^{註1}。しかし、以下のように江戸語の「サ」は、「断定」と異なる意味で用いられる場合がある。

(1) 隠居：「仮令百の銭が有ても、料理茶屋がなくはどうしたもんだ

びん：「唐だつても料理茶屋があらうサ

「浮世床」〈びん→隠居〉275-03

(2) ねこ：「○や拳○で拳とは何の事たの

ばば：「六や。五や。と、やの字を付るのがや拳さ。三で、七で、九

で、と、での字を付ていふのが○で拳だツサ

「浮世風呂」〈ばば→ねこ〉179-07

(1) は、「隠居」が苦勞しながら鯉を取って親孝行する唐人の例を挙げて話をしているが、若者達は「鯉は錢で買える」と言って理解できなかった場面である。そこで「隠居」が「錢があっても料理屋がなくてはどうする」と聞いたのに対して「びん」が「唐でも料理屋があろう」と自分の考えを示したもので、「推量」の意味を表している。また(2)では、お客がやっていた拳の事が話題になっているが、「ねこ」はその拳のことが何かわからなかったので、それについて「ばば」が教える場面である。この(2)は、終助詞「サ」が2回用いられているが、後者の「○で拳だツサ」は「拳」の後ろに断定「だ」が用いられており、そこに終助詞「サ」が後続している。このように断定の「だ」に「サ」が後続することを考えると、「サ」が「断定」であるとは言いにくいであろう。したがって「断定」という説明では、近世後期江戸語の終助詞「サ」の基本的な意味を十分に説明できないものであると思われる。そこで、本稿で

は終助詞「サ」が持つ基本的な意味がどのようなものであるのかについて考察を行う。

2.0 先行研究と研究方法

2.1 先行研究

これまでの江戸語終助詞「サ」に関する研究には湯澤幸吉郎（1954）、中野伸彦（1997）、田野村忠温（1994）、長崎靖子（2012）などがある。このうち、田野村（1994）、中野（1997）は「サ」を含む終助詞の構文的な分析であり、「サ」の意味については論じていない。「サ」の意味について論じているものは湯澤（1994）、長崎（2012）である。

湯澤（1954）は、終助詞「サ」は感動の意味を表す語であるとして、大きく「文の終わりに用いる「さ」と「文の中に用いる「さ」の二つに分け、文の終わりに用いる「さ」には「体言・形容動詞の語幹に附いて、述語をつくることがある」こと、また「「さ」が「と」に附いて伝聞の意を表す場合がある」ことを指摘している。

- (3) はる：「(前略) 爰が木や花のたんとあるお山だッサね。よい／＼、よい／＼。こゝがどん／＼橋を渡る所だッサ。

「浮世風呂」〈はる→あき〉139-11、12

(3)は、「はる」と「あき」という二人の子供が風呂の中で、となり同士という遊びをしている場面である。ここでの「お山だッサ」や「橋を渡る所だッサ」は、二人が風呂の中にいるので実際の場所ではなく、空想上の場所について話しているもので、「感動」の意味を表しているとはいえないと思われる。

長崎（2012）は、終助詞「サ」について、「断定」の意味を持つとしている。さらに長崎（2012）は、「断定」の意味を持つ終助詞「サ」が時代の変化に伴って、現代語の終助詞「さ」では「断定」の機能を失い、情意助詞としての意味しか用いられなくなったと述べている。確かに、江戸語の終助詞「サ」は体言に付くものが多く、「断定」の意味であると思われるものも多い。しかし、前述の(1)(2)のように「断定」とはいえない例もある。また、長崎（2012）が終助詞「サ」の機能を考察する際に用いている用例は、その全てが体言や名詞相当句に終助詞「サ」が付く用例であって、動詞や形容詞の終止形に付く用例は1例も挙げていない^{注2}。これが江戸語終助詞「サ」が「断定」を表すとされる要因になったのではないかとも思われる。

以上のように、江戸語終助詞「サ」についての研究は終助詞「サ」についての構文的な接続に関する研究が多く、終助詞「サ」の意味については「感動」や「断定」などの意味を持つと言われているが、それだけでは終助詞「サ」の意味として十分に説明できていないと言いはる。そこで本稿では、終助詞「サ」がどのような場面で用いられているかを分析し、それらを元にして、終助詞「サ」の意味を明らかにする。

2.2 研究方法

対象とする資料は次の近世後期江戸語の資料 6 作品とする^{注3}。

『辰巳之園』(1770)、『遊子方言』(1770)、『浮世風呂』(1808-13)、

『浮世床』(1813-14)、『春色梅児譽美』(1832-33)、『春色辰巳園』(1833-35)

この 6 作品にみられる終助詞「サ」を調査対象とするが、上記の対象作品の中で上方出身者の発話にみられる「サ」や歌の中に用いられるものについては対象外とする。

以上に従って、江戸語終助詞「サ」の用例数を示すと次のようになる。

表1. 単独の「サ」と接続・準体助詞の後ろに付く「サ」

	単独のサ	接続助詞 に+サ	接続助詞 と+サ	準体助詞 の+サ	合計
辰	8	0	1	3	12
遊	11	0	0	0	11
風	420	3	10	69	502
床	165	3	1	37	206
梅	64	0	2	8	74
春辰	54	0	4	14	72
合計	722	6	18	131	877

表2. 複合用法の終助詞「サ」

	ハサ	ヤサ	サネ	サナ	サノウ	計
辰	0	0	0	0	0	0
遊	1	0	0	0	0	1
風	16	2	33	2	2	55
床	15	0	4	0	0	19
梅	0	0	4	0	1	5
春辰	1	0	0	0	0	1
合計	33	2	41	2	3	81

表1は、終助詞「サ」が文の終わりに単独で用いられたものが722例、「そこちやアねへといふにさ」(おてば→子供達、浮世風呂 p.239-02)のように文の終わりに接続助詞「に」と一緒に用いられたものが6例、また、接続助詞「と」や準体助詞「の」と一緒に用いられた「サ」がそれぞれ18例、131例あり、合計877例ある。表2は、終助詞「サ」が他の終助詞と一緒に用いられているもので、「ハサ」が33例、「ヤサ」が2例、「サネ」が41例、「サナ」2例、「サノウ」が3例で、合計81例ある。本稿では、表2に示した他の終助詞と一緒に用いられる「サ」は、派生的な意味が生じることもあり得るので、今回の考察対象から取り除くことにする。したがって、本稿では、表1に示した単独の「サ」と助詞の後ろに付く終助詞「サ」の877例を対象とし、終助詞「サ」がどのような状況で用いられている文に現れるかという観点から、用例の分類

を行う。そしてそれらの分類に共通する点について考察を行う。また、終助詞「サ」と意味・構文的に似ている「ヨ」との比較を行い、終助詞「サ」の基本的な意味について考察を行う。最後に以上の考察をまとめることにする。

3.0 終助詞「サ」が用いられる文の分類

本節では、近世後期江戸語終助詞「サ」の意味を明らかにするため、終助詞「サ」がどのような状況で用いられているかという点に注目して分類を行う。それは終助詞が話し手の心情や心的態度を表すものであり、その心情や心的態度がどのようなものであるかは話し手がどのような状況におかれているかを考えることが有効であると思われるためである。そこで本節では、終助詞「サ」が用いられた文がどのような状況で用いられているかを分析し、それを通じて終助詞「サ」の意味について考察する。

3.1 相手の質問に対して返事をする時に用いる

江戸語終助詞「サ」は、話し手が相手の質問を受けて返事をしたり、相手が疑問を持って話したりするものに対して、話し手が返事をする時に用いられている。

- (4) ▲ : 「ヲイ、番頭、目を廻した人があるゼエ。(中略)

「誰だ／＼

「よい／＼のぶた七さ

「風」〈傍の人→傍の人〉 073-05

- (5) 銭 : 「ム、おらが伯母御の子息が、泊客に来てゐた娘と出来て、懐胎したもんだから、すぐに親許から貰つて夫婦にした

びん : 「それも恋かの

銭 : 「まづ恋さ

「床」〈銭→びん〉 353-08

(4) は、風呂の中で目をまわした人を発見して、番頭に知らせたところ、その周りが大騒ぎになったという場面である。(4) の「ぶた七さ」とは、「倒れた人は誰だ?」という一人の客の質問に対する話し手の返事である。(5) は、親戚の子が客として来た人と子供ができて、すぐ夫婦になったという話をすると、それを聞いた「びん」が「それも恋なのか」と疑問を抱いて言ったので、「銭」がその答えとして「恋だ」と返事をしている場面である。

以上のように、終助詞「サ」は、話し手が相手からの質問や相手が疑問を持って発言するものを受けて、それに対する返事をする時に用いられる。また、このような場面で用いられた「サ」は全 877 例のうち、117 例ある。

3.2 相手の話に対して、反論をする時に用いる

話し手は、相手の話を聞いて、その話に対して反対の事や意見を述べたり、反論をしたりする時に終助詞「サ」を用いる。

- (6) びくに：「(前略) 西光さん、おまへの頭巾はいつもよりあたらしくなつたやうだ。わたしが目のかすんだせへかの

西光：「ナニサ、去年のお十夜に徳願寺さまへお通夜をしたらのや、私が傍にちやんと落てあつたのさ。

「風」〈西光→びくに〉 061-08

- (7) びん：「新見世の手打蕎麦が出来た

ちやぼ：「横町の木戸際か、拳で押付よう

たこ：「ム、よかんべい

びん：「又負やうと思つて

たこ：「じぶつくりなしだよ

ちやぼ：「おめへこそじぶくるやつさ」 「床」〈ちやぼ→びん〉 364-08

(6) は、「御前の頭巾がいつもより新しくなったようだ」という「びくに」に対して、「去年の十夜にお通夜をしている時」に自分の傍に落ちていたものであると返事をしたものである。この場面では相手が「頭巾が新しい」と言ったことに対して、頭巾が「去年」の物で、古い物であるという反対の事実を話しているものであって、相手の話について反論するものであると言える。(7) は、「びん」に新しく蕎麦屋が出来たということを知った「たこ」と「ちやぼ」がそれを食べに行こうとするが、食べた後に誰がお金を出すかということを決めようとする場面である。そこで、「たこ」が「ちやぼ」に「負けてぐずぐず文句を言うなよ」と言ったので、「ちやぼ」が「サ」を用いて「おまえこそ文句を言うやつだ」と相手に反論したものである。

以上のように終助詞「サ」は、相手が話した事について、それを否定して違う事実や意見、反論を述べる時に用いられる。このように用いられた「サ」は全 877 例のうち、107 例ある。

3.3 話し手の過去の経験や知識を示す時に用いる

江戸語終助詞「サ」の文には、話し手が自分の過去の経験を回想したり、自分の知識を述べたりするものがある。このような例には、話し手が過去に経験したものもあるが、話し手の自分の経験ではなく歌や狂言など他から習得し

た事柄を引用するものもある。但し、自分の知識を述べる際に相手の質問を聞いて返事をする場面や相手の疑問を解消しようとするものもあるが、それらは3.1節の類に分類する。

(8) 角：「おまへの伯母さんは能伯母さんだね。そしてねおまへのおツかさんも気がよいからよいよ。まアお聴な。朝むつくり起ると手習のお師さんへ行ってお座を出して来て、夫から三味線のお師さんの所へ朝稽古にまるつてね。内へ帰つて朝飯をたべて踊の稽古からお手習へ廻つて、お八つに下ツてから湯へ参ると、直にお琴の御師匠さんへ行て、夫から帰つて三味線や踊のおさらひさ「風」〈角→丸〉185-10

(9) 土龍：「こゝに渾名を白と呼ぶ、窈窕なる少女がありやす。(中略)

彼少女が家は与太郎町から片側町へ出て、道程半町あまり往くと、右側に浪人者が医者かといふ住居で、黒き出格子のある家さ「風」〈土龍→皆〉346-04

(8)は、「角」が自分の母についての不満を友達「丸」に話す場面で、母が自分にどんなに厳しく沢山のことをさせているか文句を言ったものである。この(8)は、話し手が日常生活の日課について話したもので、話し手の経験を話しているものである。(9)は、「土龍」がある少女について話している場面である。「土龍」は、その少女が実在している人で、どこに住んでいるか、その少女の家の位置を皆の前で詳しく正確に話している。このような正確な描写は話し手が以前にその少女の家に行ったことがなくてはできないと思われるものである。つまり、これも話し手が経験から習得した知識であって、それを皆に話したものである。

以上のように、終助詞「サ」は、話し手が自分の持っている経験や知識を相手に話す場面で用いられる。このような「サ」は全877例のうち、104例ある。

3.4 話題の物事や人物に対する話し手の思い付き（認識）や感情を話す時に用いる

話し手が話題の人物や物事に対してその瞬間に感じた感情を話すものがある。また、感情だけでなく、話し手がその瞬間に思い付いた自分の考え（認識）を話すことがある。

(10) さみ：「(前略) おまはんのは誰にお結はせた。

たい：「お筋さんさ

さみ：「いつそ恰好がよいネエ

たい：「なアに今朝は替りだから、勝手が違ておかアしい気持さ

「風」〈たい→さみ〉 113-07

(11) けち：「ライ、コリヤ／＼、八百屋さん。／＼。(後略)

ぼんとう：「ホイ／＼。最う帰らねへ。今度から呼ぶなら、代物の名で呼かけなさいまし。幾品あつても其内の一種をよぶサ

「風」〈ぼんとう→けち〉 272-13

(10)は、朝湯に来た「さみ」と「たい」がお互いの様子について話している。ここでは、「さみ」がいつもと違う「たい」の髪形をみて「恰好が良いね」と誉めたことに対して、「たい」はいつもと違う人が自分の髪を弄ったことで、いつもの自分の結び方と違って、何か変だという自分の感情を示している。(11)は、「けち」が八百屋を呼ぼうとしているが、八百屋は気付いていなかったの、それをみた「番頭」が八百屋の持っている品物の中の一種の名を呼ぶように教えている場面である。この(11)は、どのように呼べば八百屋が気付くかということ「番頭」が「けち」に教えているものであるが、それは話し手がその瞬間に思い付いた考えであって、話し手の認識を相手に話したものであると思われる。

以上、終助詞「サ」は、話し手が話題についてどのように思ったかという話し手の気持ちや感情、あるいは、その場で思い付いた自分の考え（認識）を話す時に用いられる。また、このような場面で用いられた「サ」は全877例のうち、549例あって最も多い。

4.0 終助詞「サ」に共通する意味

以上、終助詞「サ」が用いられている文の分類を行うと、以下のようになる。

- 1) 話し手は相手の質問に対して返事をする時に用いる。
- 2) 相手の話に対して、反論をする時に用いる
- 3) 話し手の過去の経験や知識を示す時に用いる
- 4) 話題の物事や人物に対する話し手の思い付き（認識）や感情を話す時に用いる。

本稿では上記の4つの分類から共通する意味について考えていく。

まず、1)の「相手の質問に対して返事をする時に用いる」ものについて考える。

(12) 主：「マアそりやアそふと、宅のよぶすはどうだノ

米：「宅のよふすは大変サ。鬼兵衛どんの気じやア、皆に旦那さん
といはれてへ心持で居ますのサ。」 「梅」〈米→主〉 050-02

(12) は、1) の「話し手が相手の質問を受けて返事をする」時に用いられた終助詞「サ」である。長い間会えなかった二人が再会した際に、「主」が「宅(店)の状況がどうであるか」と質問したことに対する「米」の返事で「サ」が用いられている。この状況から考えると、質問した「主」は長く「宅」と関わらなかったため「宅」については何も知らなかったのであるが、返事をした「米」は、その「宅」と何らかの関りがあって、その事情を知っていたと思われる。つまり、(12) は、相手はその話題について知らないので、話し手がそれを相手に分かるように示したもので、話し手は相手より自分のほうが事情をよく知っているということを相手に示したものであると思われる。

このようなものは、2) の「相手の話に対して、反論をする」時に用いられる「サ」の文にもあてはまると考えられる。

(13) 金：「コレ／＼兄さん、すべりなさんな。鶴さんはお持遊を落すまいぞ。アよいことさ。福助さん、モウはぢやア納らねへ。子が出来ちやアみじめだぜ

源：「能おたのしみだア

金：「能苦さ。いくぢやアねへ。」

「風」〈金→源〉 062-15

(13) は、風呂に二人の子供を連れてきた「金」が子供の世話で忙しくて、それが目にあてられないほど忙しいのに「源」が「良いお楽しみだ」と話したので、それに対して「金」が反論したものである。ここでは、自分は子供の世話で忙しく苦しんでいるのに相手が「良い楽しみだ」と話したので、話し手は寧ろ「良い苦しみだ」と相手の話を否定している。つまり、(13) は、相手の話は間違っており、寧ろ自分の話が正しいもので相手よりも自分のほうが事情をよく知っている相手に反論したものである。このことから、(13) は(12)と同じく、「話し手は、相手はその話題について知らないので、それを相手に分かるように示し、相手より自分のほうが事情をよく知っていることを相手に示した」ものであると思われる。

さらに、このような意味は3) の「話し手の過去の経験や知識を示す時」と4) の「話題の物事や人物に対する話し手の思い付き(認識)や話し手の感情を話す時」の「サ」にもあてはまると考えられる。

(14) たこ：「松さん、それにつけても此鬢公は如才ねへよ。場所は五六

町預り、床は三ヶ所預つて皆弟子を出して置くツ、云分はねへ。(中略)

竹：「他の名前にして内証はてん／＼が持居るのす。(中略)

たこ：「一月の上銭が積ツたら大きな事だらう

松：「それだから床の立派な事を見ねへ

たこ：「さうさ。おつつけ台箱が金銀瑠璃碑礫瑪瑙等の寄細工になりやす。イヤ又わたしが若い頃の髪結床は、きたねへ手桶に水が汲であつて、しみつたれた小盥さ。

「床」〈たこ→竹・松〉 355-10

(15) さみ：「(前略) おまはんのは誰にお結はせた。

たい：「お筋さんさ

さみ：「いつそ恰好がよいネエ

たい：「なアに今朝は替りだから、勝手が違っておかアしい気持ちさ

「風」〈たい→さみ〉 113-07

(14)は3)に分類したもので、話し手が若い頃の床屋について回想して話したものである。「たこ」は、今の床屋の鬢公の台箱は七宝(金銀瑠璃碑礫瑪瑙等)の細工で作られた豪華なものであるが、自分が若い時の床屋では汚い手桶やしみたれた小盥であったと回想している。この時の「たこ」の話は、話し手が過去に経験したもので、自分しか知らないことである。当然、話し手の思うことは相手が知らないもので、相手が知っていたとしても自分のほうが相手より詳しく知っていることを相手に示したものであると思われる。

また、(15)は4)に分類されたもので話し手の感情を表している。(15)は、朝の風呂で会った「たい」と「さみ」の話で、二人の話題は髪結びのことである。この「たい」の話は、「さみ」が「いつそ恰好いい」と誉めたことに対しての返事であるが、寧ろ「たい」は「今朝は違う人がやったので、いつもと違って可笑しい」という自分が感じた気持ちを話していると考えられる。これは、話し手自身しか知らない感情で、相手は当然知らないものである。つまり、これも話し手が、相手が知らないことを自分が相手より詳しく知っている、ということを相手に示したものであると思われる。

以上から、1)から4)までの共通点は、「話し手は、その話題について相手が知らないので、それを相手に分かるように示し、相手より自分のほうが詳しく知っているということを相手に示す」ものであると考えられる。

このように用いられた「サ」は、体言の後ろに付いているものが多く、たしかに「断定」の意味を表すようにも思われる。しかし、以下のように必ずしも「断定」とはいえないものがある。

(16) 隠居：「仮令百の銭が有ても、料理茶屋がなくはどうしたもんだ

びん：「唐だつても料理茶屋があらうサ 「床」〈びん→隠居〉 275-03

(17) 五四朗：「イエモシどうもとんだことさネ。アノ藤さんは千葉の材木座で第一ばんの福有人、殊に侠客なお方ゆゑ世間も廣く、誰一人指さすものもねへ。ところが今度は少しむづかしい理屈、といつても外ではない。余り諸方附合が廣によつて、むだ金が際限もなく入たゆゑ、大分内證がまはつたそうさ。 「梅」〈五四朗→由〉 195-10

(16)は、「あろう」の形で、話し手の推量が表示されている。また、(17)には、終助詞「サ」の前に「そう」が用いられていて伝聞であるようにも思われるが、話題について話した人が特定できず、話し手は「藤さん」について他から聞いたり、自分が見たりして知っている事実を根拠に「藤さんの財政が悪くなったそうだ」と推測しているようにも考えられる。このように終助詞「サ」が用いられている文は「断定」だけではなく、「推量」を表している。以上から、「断定」が「サ」の共通の意味であるとは言えないと思われる。

5.0 終助詞「ヨ」との対照から見える終助詞「サ」

4.0節で述べたように終助詞「サ」は「話し手は、相手はその話題について知らないので、それを相手に分かるように示し、相手より自分のほうが詳しく知っているということを相手に示す」ものであると思われるが、江戸語終助詞「ヨ」にもこのような「サ」の意味に似たものがある。また「ヨ」は、「サ」と同じく体言の後ろに用いられることもあり、文法的にも類似する特徴を持っている。そのため、「サ」と「ヨ」を対照することが「サ」の特徴を明らかにする上で有効であると思われる。そこで、本節では終助詞「ヨ」について考察し、終助詞「サ」の意味との対照を行い、その差を明らかにする。ここでは、終助詞「ヨ」については「浮世風呂」の中で用いられている単独の「ヨ」全344例を対象とする。

5.1 終助詞「ヨ」の意味

まず、終助詞「ヨ」には、話し手の知識を元にして話すものや、話し手が状

況から認識していることを相手に教えようとするものがある。

(18) おたこ：「(前略) 手拭でお顔や手／＼をよろくお洗ひ。エ、きたない足だ。お鼻の下もば、ツちいだからお湯をかけてお洗ひ。番頭さんがお叱りだによ。ヲヤ／＼、能子におなりだぞ。上手にお洗だのう。是お見、おつかさんも上手にお洗だよ」
「風」〈おたこ(母)→小兒(娘)〉207-10

(19) おかべ：「夫はさうと、暮に買ふのを忘れたから、けふは油を買ひにやらうヤ

おいへ：「おまへ油を買なら、本町二丁目の江戸櫻でお買。あすこの油は夏もかはらず、いつそ能よ。

「風」〈おかべ→おいへ〉219-10

(18)は、自分の子供に自分で身体を洗わせるために母があやす場面で、自分の洗い方を子供に見せている。ここで母が子供に自分の洗い方をさせるためには、まず自分が綺麗に洗っているかどうかを認識しなければならない。そこで自分の洗い方をしっかり認識した上で、その洗い方を子供に教えたのだと思われる。(19)は、「おかべ」が油を買おうとすることを聞いた「おいへ」が本町二丁目の江戸櫻の油を紹介するもので、その油が「夏でも変わらない」という自分の経験や知識を元にして、「一層いい」という自分が判断した認識を相手に教えようとしている。以上のように(18)(19)は、話し手が確かであると認識しているものを相手に示している。

しかし、終助詞「ヨ」には、話し手の認識や知識を示して教えようとするものではなく、話し手が判断したことを一方的に伝えて、相手に行動を起こさせようとするものがある。

(20) 「アそりヤ／＼来たぞ。おぶうはとこだ。兄さんヤ、ころびなさんなよ。能く下を見ておあるきよ。」
「風」〈父→子〉062-04

(21) 吉：「きたねへ。おめへが咄をすると、人の顔へ唾をかけるから悪い又：「堪忍しねへな。おめへも聾が臭じヤアねへか

吉：「是ア病気だからおしつけ治ア。おめへこそ鼻の下が真赤だア

又：「エ、是も虫のせいだア。おいらはおめへのやうに鼻屎をなめヤアしやせん

吉：「エ、おいらもおめへのやうに爪は食やせん

幸：「吉さんも又さんも喧嘩するもんじやねへよ。

「風」〈幸→吉、又〉080-04

(20)では、話し手は自分の子が傍で一緒に歩いているが、転びそうにみえたので、注意喚起のため、転ばないように下を見て歩くように言い、子供に行動を起こさせようとしている。(21)は、二人の友達が喧嘩をしているので、それをやめさせようとするもので、喧嘩を止めるべきだという自分の認識を示して、二人に行動を起こさせようとしている。このように(20)(21)は、話し手の認識を示して相手に行動を起こさせようとしていて、(20)では転ばないことを、(21)は喧嘩しないことを相手に強く要求している。つまりこれは、話し手が自分の話を押し付けて相手の認識を高めようとするものであると考えられる。

ここで、改めて(18)(19)をみると、(18)は母が子供を上手に洗わせるために、(19)は自分が知っているところの油を買わせるため、話し手は自分の話を相手に押し付けているものと思われる。つまり、これらの終助詞「ヨ」もまた、「自分の認識を押し付けて相手の認識を高めようとする」ものであると思われる。

これに対して終助詞「サ」は、話し手が認識したものを相手に示すものではないが、相手に行動を起こさせようとするものは1例もみられない。

(22) 太吉：今帰らアナ。

かゝ：今帰らアナじゃねへ。直に帰るがいゝ

源：「太吉めエ、お袋に天井見せられたナ。くやしくは石垣へあたまをぶつ付けて死んででもしまふが能。おのしがやうな者は、死でも親は泣ねへツサ

「風」〈源→太吉〉094-12

(22)は、(21)の「喧嘩するもんじゃねへよ」と同じく終助詞「サ」の前に否定の意味の「ねへ」が用いられているもので、その場面は、母が探しに来たのにも関わらず、口だけ「今帰る」と返事して帰ろうとしていない「太吉」をみて友達の「源」が話したものである。しかし、(22)は、(21)の友達の喧嘩を止めさせようとして相手の行動を起こそうとするものと違って、帰ろうとしていない友達の行動について「それは死んでも親が泣かない」ほどの悪いことであるという自分の認識を示しているだけであって、友達を早く帰させるといふ、相手に行動を起こさせようとしたものではない。つまり、終助詞「サ」が相手に自分の認識をただ示しているものであって、自分の話を相手に投げかけようとするものであるといえる。これが終助詞「ヨ」の「相手に押し付けて認識を高めよう」とするものとの違いであると思われる。

以上から、「ヨ」は、「話し手が自分の話を押し付けて相手の認識を高めよう

とするもの」であり、これに対して終助詞「サ」は、「相手に自分の認識を押し付けず、相手より自分のほうが詳しく情報を知っているということをただ投げかけて示すもの」であると思われる。

5.2 終助詞「サ」と終助詞「ヨ」の比較

また、終助詞「ヨ」と「サ」は、類似する形式で用いられるものがある。ここでは、その違いを明らかにする。

5.2.1 命令の後に付かない終助詞「サ」と命令の後に付く終助詞「ヨ」

まず、終助詞「ヨ」は「動詞連用形+ヨ」の形式があり、この場合には命令の意味になるが、終助詞「サ」は命令になるものがない。また、終助詞「サ」は「動詞連用形+て+サ」のような形式で用いられるが命令の意味にはならず、全てが話し手の認識や自分に起きたことを示している。

- (23) かみ：「こりや私が誤た。そしたら其、百人首は何のこつちやエ
山：「からといふ詞の訳さ。能お聞^きよ。

「風」〈山→かみ〉 134-05

- (24) さみ：「あれからネ。わたしを送て遣う迎、新道のまがり角で^{おくつ}送つたり何角アして、とう／＼内の前まで送てさ。
たい：「いゝ気ぜんな。きつい世話やき爺だネ。

「風」〈さみ→たい〉 113-02

(23)は、「上方」と江戸人の「山」の言葉をめぐる口喧嘩であって、「上方」の質問に対する「山」の返事である。この「能聞きよ」は、相手に自分の話を「よく聞いてください」という命令的に話したものである。このように終助詞「ヨ」が動詞連用形の後ろに用いられて命令になるものは、「浮世風呂」の「ヨ」の例全344例のうち6例あるが、終助詞「サ」には1例もみられない。

これに対して「動詞連用+て+サ」の形式は分析対象とした単独の終助詞「サ」全722例のうち、24例ある。しかし、命令の意味にはならず、全てが話し手の考え（認識）を示している^{註4}。(24)は、「さみ」が前夜に起きた事を「たい」に話す場面で、酒に酔ったお客が酔っているのに自分を家まで送ってくれたことを相手に話したものである。ここでの「送ってさ」は前夜に自分に起きたことであり、話し手の経験を話しているもので命令にはなっていない。

また、終助詞「ヨ」は、動詞の命令形の後ろに直接に付いて命令の意味になるが、終助詞「サ」は動詞の命令形の後ろに付いても命令にならず、「仮定」の意味になる。

- (25) しょうとめ：「アイ／＼。おのしはよく温りやれよ
やす：「ハイ／＼。へい、あなたお静に

「風」〈しょうとめ→やす〉 150-03

- (26) かみ：「ソレ／＼。最う^{ひやくにんし}百人一首じや。アレハ^し首じやない^{ひやくにん}百人一、首
じやはいな。まだマア「しやくにんし」トいはないで頼母し
いな

山：「そりやア、わたしが云損にもしろさ「風」〈山→かみ〉 133-15

(25)は命令の後ろに直接に付いて用いられる「ヨ」である。(25)の話し手である「しょうとめ」は、風呂からあがるとき、自分の下女である「やす」に「あなたはよく温まれ」と命令しており、その命令の文（その文の命令の意味を担う形）で「ヨ」が用いられている。このように終助詞「ヨ」が命令の後ろで用いられたものは344例のうち、6例ある。

これに対して、「浮世風呂」において「サ」は(26)の例のように命令形の後ろに直接付いて用いられるものがあるが、文全体としては相手に何かを要求する命令の意味にならない。(26)は、言葉をめぐる口喧嘩の場面で、「山」が「百人一首」を「ひやくにんし」と話したので、「かみ」が「ひやくにんしゅ」であると反論したところ、それを江戸人の「山」が認めたものである。このとき「山」は「私が云い損なったことにしろ」と話していて、「しろ」という命令の形式になっている。しかし、その意味は相手に何かを要求している命令の意味ではなく、「とりあえずそうしておく」と仮に認めるといような意味である。「サ」がこのように用いられたものは、今回の研究対象の6作品の中では「浮世床」にもう1例あり、全2例だけであって、いずれも命令の意味は持たない。つまり、命令の意味を持つ語の後ろに用いられる「サ」は1例もないということである。

以上から、終助詞「ヨ」は、連用形の後ろや命令形の後ろに用いられ、命令の意味にもなるが、一方で終助詞「サ」は連用形の後ろに用いられるものがなく、「連用+て+サ」の形式はあるが、命令の意味にならず、ただ自分に起きたことを伝えたり、自分の考えを伝えたりする意味に用いられている。また、命令の意味を持つ語の後ろに直接付くものもない。このように終助詞「ヨ」が命令の後ろや命令の意味で用いられるのは、終助詞「ヨ」が「話し手が自分の認識を押し付けて相手の認識を高めようとするもの」であるためであると思われる。これに対して、終助詞「サ」が命令の意味にならない理由は、「話し手

が自分の認識を相手に押し付けず、ただ相手より自分のほうが情報をよく知っているということを相手に投げかけて示す」ためである。前節の結論と同様に、これが終助詞「ヨ」とは異なる終助詞「サ」の意味であると思われる。

5.2.2 伝聞に用いる終助詞「サ」と「ヨ」

近世後期江戸語終助詞「サ」と「ヨ」は、どちらも伝聞や引用文の後ろで用いられることがある。しかし、両終助詞の間には異なる点がある。それは、終助詞「サ」は文末に「そうサ」が6例、「トサ」が18例、「ツサ」が15例用いられているのに対し、終助詞「ヨ」は「そうヨ」と「ツヨ」は用いず、「トヨ」だけであって、その数も「浮世風呂」の344例のうち3例だけである。以下はその例である。

(27) びん：「さうかと思へば、おらが裏に俳諧師の坊さまが有たつけ。おめへ知るだらう。(中略)

びん：「ナニが、越後の方か何所とやらへ抜る山道で、野宿をしたさうさ」 「床」〈びん→銭・長〉314-14

(28) お山：「ヲヤ、おめへ灸がいぼつたの。痛かアねへか

お川：「痛いはな。けふは日本橋の藤の丸から、膏薬を買て来てもらつた

お山：「そりやア能かつたの。あすこの膏薬は能くきくとき

「風」〈お山→お川〉213-11

(29) けち：「コレ／＼。其籠の端にあるは何ぢやいな

商：「是かエ。こりやア何茸とかいふものさ。ヲ、それ／＼、舞茸とかいふ物を乾たのだツサ。」「風」〈商人→けち〉283-06

(30) 店助：「一体ぬしはよい／＼ぢやアねへ。他の病だらう

ぶた：「よい／＼。ナニ、よい／＼ぢやアねへ。医者様はの、癩癩／＼だとよ

店助：「腎虚だらう

「風」〈ぶた→店助〉287-01

(27)の「びん」は、自分の家の裏側に住んでいた俳諧師が山道で野宿した時に起きたことについて話しているが、自分が直接見たものではなく、誰かに聞いたことを皆に伝えようとしている。このときに終助詞「そうサ」が用いられている。(28)は、「お川」が治療のため、日本橋の藤から膏薬を買ってきたことを聞いた「お山」の返事である。ここでの「お山」は、既にその膏薬について知っているが、自分が実際に使って知っているというわけではなく、誰かか

らその膏葉がよく効くことを聞いて「お川」に伝えている。ここでも終助詞「サ」は「～ト」の後ろに付いて伝聞として用いられている。(29)は、「ツサ」のもので、「籠の中にある物が何か」という「けち」の質問に「商人」が返事をする場面である。(29)の「商人」は、最初はその物の名前が何か思い出せなかったが、後から思い出して返事をしている。これは、自分が舞茸を乾かしたものであれば、すぐ思い出して返事ができたであろうが、他人から貰ったものであったので、すぐには思い出せなかったと思われる例である。つまり、この用例の「サ」は他人の話を伝えたもので、伝聞の意味で用いられていると思われる。

これに対して、終助詞「ヨ」も伝聞に用いられたものがある。(30)は、「店助」が「ぶた七」に「よいよいではなく他の病でしょう」という疑いを述べたことに対する「ぶた七」の反論で、医者に「癩癩である」と言われたことを伝えている。この時に「トヨ」という形で「ヨ」が用いられている。この「ヨ」を含む文は医者が話したことをただ相手に伝えようとするものではない。「ぶた七」は、自分がただの「よいよい」ではなく「癩癩」であると医者に言われたことを相手に強く押し付けることを通して、自分がただの病ではないということ伝えようとしている。このことは、この文脈の後ろで「ぶた七」が「何の／＼。おら気ぢや、おら気ぢやアの、色の病だ」と話していることから分かる。このように相手に出来事をただ伝えようとするものではなく、相手に出来事を伝えてそれを知ってもらおうとするために「トヨ」が用いられている。しかし、「浮世風呂」の中で伝聞の意味で用いられた「トヨ」は3例しかなく、終助詞「トサ」に比べて少ない。また、「ソウヨ」など、他の伝聞の意味を持つ語に「ヨ」が付いて用いられたものもみられない。

以上から、近世後期江戸語の伝聞には、終助詞「ヨ」があまり用いられず、寧ろ、終助詞「サ」がより多く用いられていることが分かる。これは、前節でみたように終助詞「ヨ」が自分の話を相手に押し付けようとするものであるため、伝聞にはあまり用いられないことが原因であると思われる。これに対して、終助詞「サ」は、話し手が自分の認識を押し付けず、相手より自分が知っていることを投げかけて示すものであるため、「ヨ」に比べて伝聞に用いられやすいのだと考えられる。

6.0 終わりに

本稿では、近世後期江戸語終助詞「サ」の基本的な意味を知るため、「サ」が用いられた文の状況を考察し、次のことを明らかにした。

- 1) 話し手が相手の質問に対して返事をする時に用いる。
- 2) 相手の話に対して、反論をする時に用いる。
- 3) 話し手の過去の経験や知識を示す時に用いる。
- 4) 話題の物事や人物に対する話し手の思い付き（認識）や話し手の感情を話す時に用いる。

また、上記の共通点は、「話し手は、相手はその話題について知らないので、それを相手に分かるように示し、相手より自分が知っていることを示す」という機能であると思われる。似た用法を持つものとして終助詞「ヨ」があるが、「サ」と比較すると、終助詞「ヨ」は「話し手が自分の話を押し付けて相手の認識を高めようとする」ものであるのに対し、終助詞「サ」は「話し手が自分の認識を押し付けず、自分が相手より知っていることをただ投げかけるように示す」ものであると言える。これが江戸語終助詞「サ」の基本的な意味であると考えられる。

以上、江戸語終助詞「サ」の基本的な意味について考察を行ったが、本稿の始めに述べたように近世後期江戸語には文末に用いられる終助詞が数多くある。しかし、それらの意味はまだ明らかになっていないものも多い。本稿はその一環として「サ」の意味について考察したが、まだ明らかになっていない他の終助詞についても今後さらに分析を進めたいと考えている^{注5}。

注

- 1 長崎靖子（2012）は「断定」について、寺村秀夫（1982）が述べている「判定措置」の意であると言い、「現代語では「だ」、「です」「である」「であります」「でございます」（寺村はこれを一括して「判定詞」と呼ぶ）を加えて成立する文、いわゆる名詞述語文の表現形式をさす」と述べ、これらを「断定表現」としている。
- 2 長崎靖子（2012）は、終助詞「サ」の意味について、「第1章 江戸語終助詞「さ」の機能に関する一考察」（『断定表現の通時的研究—江戸語から東京語へ—』2012、pp.65-90）において「断定」であるという。これは、終助詞「サ」が体言や「ノサ」のように体言相当句に付くものが多く、用言の終止形に付くものが少ないためであると思われるが、少数である用言の終止形に付くものも

考えるべきである。

- 3 使用テキストは『浮世床』(床)と『辰巳之園』(辰)は日本古典文学全集、『遊子方言』(遊)、『浮世風呂』(風)、『春色梅児誉美』(梅)、『春色辰巳園』(春辰)は日本古典文学大系による。以下の引用では作品名は()内の略称で示し、「」内に話し手→聞き手を示す。数字はそれぞれページ・行を表す。
- 4 これに対して現代語に見られる「送ってよ」のように命令になる「動詞連用+て+ヨ」の形式が、今回分析対象にしている作品中での近世後期江戸語の終助詞「ヨ」には1例もみえない。
- 5 これまで明らかになったものは、終助詞「ハ」、「ナ」、「ゾ」、「ゼ」である。それぞれの意味は、黄孝善(2013)では「ハ」について「状況の中から生じた「ずれ」を話し手が表出する」、黄孝善(2014)では「ナ」について「話し手が得られた情報や相手を取り込む際に自分の経験を参照し、そのときに自分側に生じた不安定なものを安定させようとしている過程を示す」、また、黄孝善(2016)では「ゾ」と「ゼ」について、「ゾ」は「話し手が状況から新たに認識した情報を相手に伝え、それを新たに認識させようとする」、「ゼ」は「話し手のおかれた状況に対してそこでの事実を指摘しながら、その状況に対して非難したり、マイナスの評価をしていることを示す」ものであるとしている。

参考文献

- 田野村忠温(1994)「終助詞の文法—江戸語資料に見る終助詞の体系性—」『日本語学』13-4、明治書院
- 寺村秀夫(1982)『日本語のシンタクスと意味』1、くろしお出版
- 中野伸彦(1997)「江戸語の終助詞・上接部の種類の整理(一)—い・え・さ・す・ぜ・ぞ—」『山口大学教育学部研究論叢 人文科学・社会科学』7-1、山口大学教育学部
- 長崎靖子(2012)『断定表現の通時的研究—江戸語から東京語へ—』武蔵野書院
- 黄孝善(2013)「近世後期江戸語終助詞「は」の意味」『文藝研究』176、日本文芸研究会
- (2014)「近世後期江戸語終助詞「ナ」の意味」『言語科学論集』18、東北大学大学院文学研究科
- (2016)「近世後期江戸語終助詞「ゾ」と「ゼ」」『国語学研究』55、東北大学大学院文学研究科
- 湯澤幸吉郎(1954)「第一二助詞 第三節 添意助詞」『江戸言葉の研究』明治書院

근세후기 에도어 종조사 「サ」

황 효선

근세후기 에도어 종조사 「サ」의 의미가 「감동(感動)」 「단정(断定)」 등의 의미를 가지고 있다고 하지만, 그 의미로는 종조사 「サ」가 가진 기본적인 의미라고 하기에 충분히 설명되지 않는 것도 있다. 그래서 「サ」의 기본적인 의미를 규명하기 위해, 「サ」가 사용되어진 상황을 자세히 분석해 나누었다. 그 결과, 종조사 「サ」는 1) 화자가 상대의 질문에 대해서 답을 할 때, 2) 상대의 이야기에 대해 반론을 할 때, 3) 화자의 과거의 경험이나 감정을 말할 때, 4) 사람이나 일 등 화제에 대한 화자의 인식이나 감정을 말할 때, 사용되고 있었다. 이러한 분석결과로 부터 공통된 의미를 살펴보면, 「화자는, 상대가 화제에 대해 잘 모르고 있다고 생각해, 그것을 상대가 잘 알 수 있게 말하는 것, 즉, 화제에 대해 상대보다 화자 자신이 더 잘 알고 있다는 것을 표시하는 것」이었다. 이것이 근세후기 에도어 종조사 「サ」의 기본적인 의미인 것이다.